

## 一橋大学社会科学古典資料センター主催講習会を受 講して

原賀, 可奈子  
九州大学附属図書館資料整備室図書受入係

羽賀, 真記子  
九州大学附属図書館資料整備室図書目録係

<https://doi.org/10.15017/24955>

---

出版情報 : 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2011/2012, pp. 36-42, 2012-07. 九州大学附属図書館  
バージョン :  
権利関係 :

## 報告

# 一橋大学社会科学古典資料センター主催講習会を受講して

原賀 可奈子<sup>†</sup> 羽賀 真記子<sup>‡</sup>

### <抄録>

一橋大学社会科学古典資料センターが開催している西洋古典資料保存講習会、西洋社会科学古典資料講習会の両講習会について紹介する。

<キーワード> 一橋大学社会科学古典資料センター、西洋古典資料保存講習会、西洋社会科学古典資料講習会、資料保存、資料修復

## Report of the courses by Center for Historical Social Science Literature, Hitotsubashi University

HARAGA Kanako HAGA Makiko

### 1. はじめに

一橋大学社会科学古典資料センター（以下、センター）では、全国の図書館職員、西洋社会科学の研究者等を対象に、西洋社会科学古典資料講習会と西洋古典資料保存講習会というふたつの講習会を毎年開催している。今回、研究開発室の「資料保存に関する調査研究」に所属する職員2名がこの講習会を受講する機会を得た。センターの許諾をいただき、講習会の内容をご紹介します。

### 2. 西洋社会科学古典資料講習会[1]

昭和55年度から開講されている西洋社会科学古典資料講習会は、全国の図書館職員、西洋社会科学の研究者等を対象に、西洋社会科学古典研究、西洋書誌学、西洋社会科学古典資料の保存・管理を中心に講義が行われており、第31回目となる平成23年度は11月9日～11日の日程で開催された。

受講者33名のうち、受入・目録担当者だけでなく、リポジトリ担当者が多かったことが印象的であった。原資料そのものを保管してだけでなく、原資料を保管しつつ利用者への利用に供するためのひとつの方法として電子化が浸透してきていることを実感せずにはいられない。

日常業務では図書の受入や支払・決算業務が中心であり、西洋古典資料に触れる機会はほとんどないのだが、研究開発室の資料保存に関する調査研究事項に所属している関係で、今回、受講を希望した。

#### 2.1. 1日目（11月9日）

#### 2.1.1. 書誌学（Ⅰ）図書館員のための書誌学入門（大東文化大学文学部 武者小路信和准教授）

古典資料の造本工程を通して、オリジナルの古典資料の面白さを知ることができた。植字工の好みや癖、行末調整によって著者稿とのあいだにズレが生じるということはとても興味深い。活版印刷や組みのミニチュア、植字を実際に見せていただいたことで、当時の印刷工程に対するイメージが湧いた。

洋書の発注を行う際に、edition, issue等の記述を見かけるため、それぞれ別版であると大まかに理解していたつもりではあったのだが、「実質的に同じ組版から印刷されたすべてのコピー」がedition、「一時期に同一の組版を使って印刷されたすべてのコピー」がimpression、「理想本の基本的形態とは区別される、意図的に計画された出版単位として制作されたすべてのコピー」がissue、「理想本の基本形態に比べて異なっている状態のあるコピー」がstate、とそれぞれ細かく状態が違うことを知り、認識を新たにした。同時に印刷、出版された本でも、本文に異同が生じる可能性があり、その意味でも、古典資料は一点一点がオリジナルである、ということが印象的だった。

#### 2.1.2. 書誌学（Ⅱ）デジタル書物学：資料デジタル化と書誌学の幸せな結びつき（慶應義塾大学文学部 安形麻理准教授）

今回、当講義が組み込まれていることで、古典資料保存の方法のひとつとしてデジタル化が重要視されていることを実感した。参加者にリポジトリ担当者が多かったことも、そのことを表しているのだと思う。資料のデジタル化にあたっては、様々なプロセスを経て

<sup>†</sup> はらが かなこ 九州大学附属図書館資料整備室図書受入係 (〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1) E-mail: k-haraga@lib.kyushu-u.ac.jp  
<sup>‡</sup> はが まきこ 九州大学附属図書館資料整備室図書目録係 (〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1) E-mail: cactus@lib.kyushu-u.ac.jp

いかなければならず、容易ではない。しかし、シナイ写本の例のように、分散した資料をデジタル化によって復元することで多くの研究者が全文を閲覧することが可能となったように、その成果は大きい。デジタル化と書誌学は相反するように思われるが、画像処理を行うことによって難読文字の解読や、校合（本文の異同を比較・記述する）を行い、印刷工程の解明に至った例もあるという。

著作権等クリアしなければならない点もあるが、これからもデジタル化は加速し、技術も飛躍していくのだろう、と思わずにはいられなかった。

### 2.1.3. 書誌学 (Ⅲ) 『稀観書の書誌記述』による目録作成 (一橋大学社会科学古典資料センター 床井啓太郎専門助手, 福島知己専門助手)

西洋社会科学古典講習会と聞いて、真っ先に思い浮かんだのが古典資料の書誌作成だった。今回の講義の中で、実際に目録作成の演習もあったのだが、最も興味を惹かれたのはプリンターズ・デバイスの話であった。同一年に刊行された同一書であっても、印刷所が異なれば印刷所の意匠であるプリンターズ・デバイスが異なる。また、印刷年によってプリンターズ・デバイスが変化していることもある。出版社の歴史とともにプリンターズ・デバイスが変化しているという点も興味深い。講義で紹介されたエルゼビアの例の場合、樹木と人物とモットーを記した文字、という3点は共通しているながら、描かれている樹木が榆からオリーブへと変化したり、樹木の傍らに立っている人物が隠者からアテナへと変化していたりする。また、モットーの記載そのものの変化だけでなく、果実や鳥を配置することによって意匠が表す意味を変化させていたりする点が面白い。稀観本の場合、一点一点がオリジナルであるということの意味を、より一層感じた。

## 2.2. 2日目 (11月10日)

### 2.2.1. 古典研究 (Ⅰ) 古代ギリシアの文字化とホメロス (一橋大学大学院言語社会研究科 古澤ゆう子教授)

アルファベット発祥の地である古代ギリシアでは、文字が誕生してもなお口承伝統が長く続いたという。ギリシアの民族的叙事詩であり、西洋初の文学とも言われているホメロス作『イリアス』は、文字使用の広がりと同時期に成立したと言われている。18世紀頃、死んだはずの戦士が後半に再び登場するなどの『イリアス』の矛盾が指摘され、ホメロスは誰だったのか、ホメロスとはひとりであったのか、という疑問が浮上し、無文字時代の長編叙事詩の作成は不可能であるという主張、著者は複数いたとする説、元の物語に複数の物語が付け加えられていったとする説などが現れたという。『イリアス』は1万5千余行の叙事詩であるた

め、文字なしにそれだけの量の叙事詩が成立するののかという疑問もあがる。記憶することと文字化すること。物語成立への議論の中、当時の口承叙事詩が既成の句を組み合わせたり、決まった要素を組み合わせたりして即興で物語を作成する技法だったということが判明する。ギリシア民族は叙事詩を朗唱し聴くものであるとみなしており、文字の便利さを悟ったがゆえにアルファベットを案出し、文字に頼りすぎる危険性を知っていたからこそ語りを重視した、という点には考えさせられるものがある。

### 2.2.2. 古典研究 (Ⅱ) ウィリアム・モリスから受け継ぐもの (神奈川大学経済学部 出雲雅志教授, 青山学院大学 板井広明講師)

ウィリアム・モリスの名前は、世界史で目にし、芸術家というよりも思想家のイメージが強かったのだが、書物装丁に関わりの深い人物であったことということを知り、意外な結びつきに興味を惹かれた。モリスは本の見開きページの余白に関するルール (ウィリアム・モリスの法則) を作成し、活字デザインやインク、レタリング等にもこだわり、美しい書物を作ること力に注いでいたのだという。産業革命による大量生産の時代の流れの中で、中世的世界の労働の喜びと手仕事の美しさに回帰し、生活と芸術の一致を計ろうとしたモリス。資本主義社会の中で、自由で創造的なギルド職人の精神を引き継ぎ、実践しようとしていたモリスが、「日常生活の身のまわりを美しくする」芸術として、書物を建築に見立て、書物にその意味を見出していたことが印象的だ。

### 2.2.3. 保存・修復 (Ⅰ) 西洋古典資料に使われる材料: 製本と保存 (製本家・書籍修復家 岡本幸治氏)

資料保存にあたっては原材料を知ることが重要である、ということは、古典資料にあまり触れることのない日常の中では忘れがちになってしまっている。紙質や皮革の種類、布や折丁、製本の構造……。それらひとつひとつを取ってみても、様々な種類があり、時代によって仕様が異なることが、この講義でわかった。西洋古典資料に使用されている材料は様々であり、その材質に合った修復が求められる。西洋古典資料は一点一点がオリジナルである、ということは印刷による植字の差異や装丁だけでなく、使用されている原材料や製本仕様についても言えることである。そのため、その資料の状態、使用されている材料を念頭に、修理を施すか、そのまま保存するかの判断を下す必要がある。劣化は防ぎたい、しかし、修理をすることでかえって劣化を促進させてしまうこともある。利用と保存のバランスを考え、修理をするか、そのまま保存するかかの判断をすることは難しいことであるが、資料を後世に残していくためにも必要なことだ。保存・修復

方法だけでなく、書物そのものに対しての知識を深めていく必要があると認識を改めた時間でもあった。

#### 2.2.4. センター見学・工房実演

この時間では、センター内と修復工房での修復の様子を見せていただいた。センター内には、書庫内に温湿度を一括管理できるモニターがあり、書庫内の環境の変化をなるべく起こさないように7月中頃～9月初め頃までに限って空調を入れているという。一気に-30℃まで下げることのできる凍結殺虫用の冷凍庫もあり、この中で-40℃の環境を一週間続けることで殺虫殺卵が可能という。また、書庫二層では靴からスリッパに履き替えることで外部からの砂塵等を持ち込まないように配慮されていた。LEDや人感センサーが備え付けられ、照明による影響に対する配慮もなされている。天井に噴出口、壁に吸出口があり、空気循環システムが稼働している。周囲にはドライエアを備え、外の影響をシャットアウトできるようになっていた。また、壁には湿度調節のための調湿ボードが備えられており、床は掃除をしやすい素材となっていた。地震対策として、書架同士を頭つなぎで連結させ、下をボルトで固定し、棚の最上段に書籍の転落防止バーを設置してあった。東日本大震災の際も書籍は1冊しか落下しなかったそうだ。

センター内にある修復工房では実際に行われている古典資料の保存作業の様子を見せていただいた。ダスクャッチャーやミュージアムワイパーを用いてのクリーニング、保革油の塗布、保護ジャケットをかける過程で、1点1点をチェックし、保存カルテも作成されている。保革油については長いスパンで見た場合の影響が明確にわかっているわけではないが、工房で1992年にこの作業を始めてからの状態は良好であるという。一昨年、本調査研究事項でもレッドロット対策として実験的に保革油の塗布を行っていたため、実際の作業の様子を見ることができたこと、アドバイスをいただけたことはとても有益であった。

### 2.3. 3日目(11月11日)

#### 2.3.1. 資料展示論 図書館展示の5W1H(元慶應義塾大学環境情報学部教授 澁川雅俊氏)

資料展示は一般の人々に対して、資料を見てもらいそれらを活用してもらうこと、ということを知り、考えさせられた。たしかに研究者であれば、必要な資料を求めて自ら行動する。一般の人々をどれだけ惹き込み、興味を持ってもらうか、ということは資料展示において重要なことである。ふいに訪れた先で行われていた資料展示が、その人にとっての生涯学習の糸口となるかもしれない。

展示にあたっては資料の選択が重要となる。「資料を選び集めて〈物語〉を創る」という言葉は特に印象

的であった。何のためにその資料を展示するのか、また、何を見せたいのかがわかるように、本当に見せたいものを見せる、という絞り込みの必要性は身につまされる。企画、準備、運営、評価のステップを踏み、次へつなげるということが重要であり、展示は「人々に夢を見せる」こと、という言葉が印象に残っている。

#### 2.3.2. 古典研究(Ⅲ) 経済学の起源: フランスのコンテキストを中心に(下関市立大学 米田昇平教授)

1776年に刊行されたアダム・スミスの『国富論』は市場メカニズムに着目した自由主義の経済学であり、一般的には経済学の起源だと考えられている。スミスは生産を重視し、節約・節欲に基づく資本の蓄積こそが生産力の自己増殖につながると考えていたのだが、それは消費・消費欲求の側面を相対的に軽視しているものであった。本講義ではスミスが軽視した消費・消費欲求に重点を置いた17世紀後半から18世紀初頭のフランスに着目、フランス独自の経済学がどのように生まれたのか、当時の経済学者の著作を元に、その流れをご紹介いただいた。

当時のフランスではアウグスティヌス主義の影響によりペシミスティックな人間理解から功利主義的な見方がされていた。富や利益を求めめる情念が人間同士を結び付け、相互的効用によって世界の調和をもたらす国家を維持するという考えが生じ、欲求を控えれば経済が収縮し消費不況へ陥るという儉約のパラドックスが発生する。消費社会における儉約のパラドックスは現代社会にも通じることであり、非常に興味深い。

欲求は人々を精励へと促し、多様な学芸や職業を生み出して文明化を進める元となるが、その対象は装飾品や衣服、家具等奢侈へと移り、消費へとつながる。欲求が生産を規定し社会の構成そのものを規定するという消費主導の経済から、スミスなどイギリス経済学との対比を行うことによって、フランス独自の経済学は展開されていった。

本講義を受けている最中に、大学時代に受けた教育学の講義で、学ぶということは過去の文化遺産である知識を受け継ぐことである、と教わったことをふと思い出した。その当時の知識を記録した書物は、文化遺産そのものだ。歴史は繰り返すと言うが、背景は違えども儉約のパラドックスのように現代に通じる思想もある。当時の知識を受け継ぎ、現代に活かすことに歴史を学ぶ意義がある。利用に供するために書物を保存していくことの大きな意味を感じた。

#### 2.3.3. 保存・修復(Ⅱ) 材料と環境(昭和女子大学大学院生活機構研究科 増田勝彦教授)

個人的にIPM(Integrated Pest Management: 総合的有害生物管理)に関心を持っていたため、具体的な資料

保存方法にふれる当講義はとても興味深かった。清掃が重要であることは IPM について調べている際にもよく目にしていた事柄であったが、改めてその重要性を感じた。最も取り組みやすい事項ではあるが、利用者の目に付く場所を優先にしがちであり、書庫の清掃は日常疎かになっている部分でもある。最下段は 10cm 以上開ける、また、書架の背を壁に密着させないことで、掃除をしやすい書庫にする、ということのを伺い、まずは環境を整えることが大切だと思った。また、殺虫方法として凍結殺虫法を知ることができたことも有益であった。前日にセンター内を見学させていただいた際に凍結殺虫法用の冷凍庫も見せていただいていたのだが、釣り用の冷凍庫でも代用ができるということのを伺い、本館でも取り入れることができるのではないかと可能性を感じた。本館でも図書目録係で実験的に脱酸素濃度殺虫法を行いはじめていたところであるが、今後、本研究開発事項でも資料への影響が少なく殺虫効果のある凍結殺虫法も視野に入れていきたい。

## 2.4. 講習会を終えて

最初に西洋社会古典資料講習会という名前を聞いたとき、書誌学や目録が主であるイメージを受けていたのだが、実際の講義では資料のデジタル化や展示など、時勢に合った内容が含まれていることに驚いた。内容は幅広かったが、古典資料研究から展示につなげることもできるし、研究に役するためにデジタル化を進めることもある。また、様々な古典資料を残していくために保存(ときには保存のために修復)を行っていく、と考えると、すべての講義はつながっている。

普段の業務ではなかなか古典資料に触れる機会はないのだが、本講習会を受講できたことで、敷居の高かった西洋古典資料に対して面白さを感じる事ができたことは非常に有意義であった。保存・修復に関しては、資料保存に関する調査研究に還元できそうなものが多かった。今回の講習会で得た知識を今後の活動に活かしていきたい。

## 3. 西洋社会科学古典資料講習会

西洋古典資料保存講習会は、国公立大学図書館及び大学その他の研究機関に所属する者で、西洋古典資料の整理または調査研究に従事している者を対象として、毎年夏に 3 日間の日程で行われている。「応募者多数の場合、西洋社会科学古典資料講習会修了者を優先する」とされているが、西洋社会科学古典資料講習会が定員 30 名なのに対し西洋古典資料保存講習会は定員 8 名と、非常に狭き門である。

2005 年に開催された第 25 回西洋社会科学古典資料講習会を受講した後、数回の応募と落選を経て、2010 年 7 月 5 日～7 日に開催された第 11 回の西洋古典資料

保存講習会を受講する機会をいただき、本学からは 3 人目の受講者として参加した。

西洋社会科学古典資料講習会が書誌学の講義中心であるのに対し、西洋古典資料保存講習会はより資料保存に直結した講義と実習が中心となる。カリキュラムは、大きくは昭和女子大学大学院生活機構研究科の増田勝彦教授の講義およびケーススタディと、製本家の岡本幸治氏の指導による実習に分けられる。

受講者には課題が与えられ、事前にレポートを提出する。第 11 回の際のテーマは「自館での資料の保存活動について」および「その中で懸案となっている事項や今後の課題について」であった。

### 3.1. 増田先生の講義

増田先生からは資料保存に関するさまざまな問題についてご説明をいただいた。その中からいくつかご紹介する。

講義の最初に、先生から「学生に『長期とはどれくらいの期間か?』と尋ねて、返ってくる答えの平均はどれくらいになると思いますか」との提起があった。正解は約 20 年だそうである。資料の保存期間としては特に長くはないが、一般の人々に長期保存について説明をするには、まずこの認識を基本としなければならないとのことだった。

#### 3.1.1. 環境管理について

温度湿度の管理、特に湿度管理が重要であるとのことだった。しかしこれは、24 時間エアコンを入れておくべきだ、ということではない。エアコンは温度(機種によっては温湿度)を一定の範囲に保つもので、恒温恒湿を維持するものではない。細かな温湿度の上下を繰り返すことによって紙の含水率の変化が繰り返されて紙の結晶化が進み、紙がもろくなってしまうという。細かい温度上下の繰り返しがあるよりも、多少室温が高くなるろうとも、一年を通じて緩やかなカーブを描くような温度管理をするほうが資料の長期保存には適しているとのことだった。実例としてアメリカと日本・ヨーロッパでの酸性紙調査の結果の差、正倉院や敦煌文書の良好な保存状態の紹介があった。

建築としては、やはり壁が厚いと外気温の影響を受けにくく、また、収蔵庫を建物の中心部に配置すると、周囲の部屋等が厚い壁と同様の働きをし、収蔵庫に外気の変化を伝えにくいとのことである。図書館では外側から閲覧スペース→開架書架スペース→貴重図書室とすると、特に保存が必要なものに対して良い環境を準備できることになる。

IPM について、一番大切なのはしょっちゅう人間の目で確認すること、“目通し風通し”であると教わった。こまめな点検は、専門家ではなく図書館員のできる IPM の活動だと思う。自動書庫の問題を論じていると

きにも、チェックしやすい環境にするのが大事であり、そのためにも自動書庫を人が見回れるような構造にできないか業者と相談してみるべきだとのこと指摘があった。実際に、本学の自動書庫でも職員が中に入れないことによる問題が発生しており、今後新図書館に自動書庫を導入する場合には考慮しなければならない点である。

ケースや箱の効用について、埃を防ぐために有効だというご説明をいただいたのだが、その際に、たとえ新聞紙を使ってでも埃から守った方が良いというのは発想になかった。新聞紙から酸が移って良くないだろう、と思っていたのだが、酸のマイグレーションは長期間の接触がないと起こらないのに対し、埃が湿気を吸ってカビの温床となる速度の方が速く被害も大きいので、どちらかを取るとすれば防塵を優先すべきということであった。同様に、緊急時であれば、水損資料の手当てで使う吸取り紙に新聞や雑誌を使っても構わない、カビで傷むスピードの方がずっと速いから、というご説明もあった。もちろん問題のない資材を日頃から準備して使うことが第一だが、優先すべきこと・緊急度の高いことをはっきりさせておくことが重要だと学んだ。

### 3.1.2. 低温処理法について

近年、薬剤を使わない殺虫方法が開発されているが、その中から増田先生が実践していらっしゃる低温処理法が紹介された。これは、資料を冷凍庫で $-30^{\circ}\text{C}$ 以下に冷やすことで害虫を死滅させる方法である。

薬剤等を使用しないことから、特別な技能・資格のない職員でも処理を行うことが可能である。冷凍庫に求められる要件は $-30^{\circ}\text{C}$ 以下の温度を維持できることで、特に高機能なものである必要はない。また、使用するときだけ電源を入れればいいので、維持費もさしてかからない。

また、水濡れ資料への処置としても、冷凍法をご紹介いただいた。水で濡れた資料はそのまま乾くと紙が波打ち状態になってしまうほか、長期間湿ったままで置いておくとカビが発生し、最悪の場合腐ってしまう。冷凍庫に入れることでカビの繁殖を抑えることができ（ただしカビの菌は死滅しない）、すぐに乾燥処置に進めない場合に状態を悪化させずに保管することができる。

複数の用途に有効に活用でき、また導入及び維持費も多大ではないと思われるので、冷凍庫の導入を検討したいと考えている。

### 3.1.3 ケーススタディ

事前に提出したレポートをもとに、いくつかのテーマで受講者が発表をし、先生がたに原因の検討や対策のご説明をいただいた。

カビの問題、書庫の酸性化問題、資料の修復について、デジタル化（媒体変換）について、自動書庫についてなど、さまざまな内容について意見交換を行ったが、いくつもの課題の中で、業者との関係について論じられたのが印象に残っている。共通して言えるのは、業者の言うことを完全に信用してはいけないこと、検品ができるよう図書館職員も知識を得ておく必要があることである。業者と協力してより良い状態を作るよう努力すべきなのは当然であるし、仕様書に職員の勉強会も含めて業者から情報を得るとのご提案は、とても有効でぜひ取り入れたいと思った。

## 3.2 岡本先生の講義・実習

受講者は自館から革装の所蔵資料を持参しており、それに対して各種の処置を施すほか、書見台・封筒フォルダーの製作等を行う。岡本先生が手本を示してくださった後、受講生が実習を行い、センターのスタッフの方が補助として手助けをしてくださる。

実習内容の詳細についてはセンターの紀要[2]に掲載されているのでそちらをご覧ください。ここでは、持参資料に施した一連の処置を紹介する。

### 3.2.1 調査票の記入

実際に資料に手を入れる前に、調査票を記入するところから修復作業が始まる。講習会で使用したセンターの調査票は、メンガー文庫のマイクロ化に伴う保存作業の際に作成した「保存カルテ」を改訂し、コンピュータに取り込んでデータ化できるようにしたものである。

構造・材料・劣化状態それぞれについて細かな項目が設定されており、該当項目に丸をつけていく形式となっている。初心者だと各項目内容の見極めができるようになるのが難しそうだが、それさえクリアできれば、個人差が出にくい方式である。また、各項目には「わからない」という選択肢があるが、これは記載漏れと混同するのを避けるために設けられているとのことである。

### 3.2.2 クリーニング・ワックスがけ

資料に対する最初の処置はクリーニングである。クロス（ミュージアムワイパーを使用。少し硬いので最初に洗うと良いとのこと）で小口からクリーニングを行う。この際、内部に埃が入り込まないように、資料をしっかりと閉じた状態にしておくことが重要である。埃がひどい場合は見返し部分も刷毛とクロスできれいにする。

続いて、ヒドロキシプロピルセルロース（HPC）1.5%溶液を表紙に塗布する。これは劣化した革の目止め剤である。HPCが乾いたら、保革油（Marney's Conservation Leather Dressing）を使用し、古くなったTシャツ地等の柔らかい布を使って、すり込むように塗布する。

これを半日以上乾かしてから、最後にアクリルポリマーのコーティング剤（SC6000 を使用）を塗って乾かす。コーティングすることで、革の劣化原因である窒素酸化物や硫化物の侵入が防げるとのことである。最後にから拭きして仕上げる。

処置前と比べ、手触りがしっとりとなるが、べたつくことはない。色は処置前よりも少し濃くなった。



写真1 同じシリーズの資料。

右が処置前，左が処置後。

保革油については、変色するなどの理由で使用に賛否両論があるそうだが、センターではメンガー文庫の資料に1992年頃から塗布していて、塗布していないもの比べて状態が良いことから、現在のところ使用をやめる理由はないと考えているとのことであった。

### 3.2.3 保護ジャケット作成

資料に中性紙で作った保護ジャケットをかける。構造がしっかりしている資料の場合は AF プロテクト H 209.4mg/m<sup>2</sup> を使用するが、持参した資料のおもて表紙が外れていたため、それよりも薄い AF プロテクト H 104.7mg/m<sup>2</sup> を使用した。

片方の表紙が外れている場合は、表紙の幅の5倍プラス厚み分の長さの中性紙を準備する。天地の幅は資料の天地に合わせる。外れた表紙の小口側に中性紙の端を合わせ、表紙の表側→裏側→表側と巻きつける。続いて本体と合わせ、背・本体に付いたままの表紙にたるみのないよう巻きつけ、最後はのどに当たらないところで余分を切り落とし、取り外して四隅をコーナラウンダーまたは彫刻刀・ハサミ等で丸く整える。折線をつけたらいったん取り外し、天地に垂直になるようきちんと折り目を入れ、改めて資料と合わせるのが大事である。



写真2 ジャケットを上から見た図(左)と装着図(右)

このジャケットをかけることで、表紙が外れていても、気をつければ一体として扱うことが可能になる。

### 3.2.4 保存箱の作成

最後に、資料を入れる保存箱を作る。形状としては、和本の用紙の内側に、上下から覆うパーツを取り付けた状態に近い。

横から巻きつける形になる外側には AF ハードボード 0.63mm (ボール紙)、上下から覆う内側にはアーカイバルボード (中性紙段ボール) を使用した。ボール紙を裁断し (演習では裁断した紙が準備されていた)、切り口をヘラなどでこすって平らにして折り線を入れる。ボール紙を折るときは、折る部分を濡れ布巾で少し湿らせてから折るとひび割れを起こさないとのこと説明があった。外側には差し込み口と差し込み部を作り、留め具がなくても箱を閉じられるようになっている。差し込み部を作るためにセンターで考案されたゲージを使用した。簡単に位置と形を取ることができる、大変便利なものだった。

2つのパーツが仕上がったら、両面テープで貼り付けて組み立てて完成である。

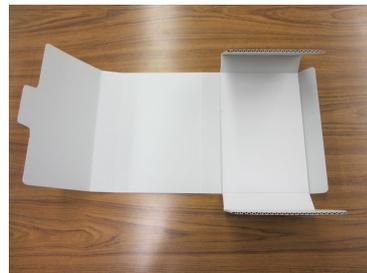


写真3-4 保存箱を展開した図(上)と組み立てた図(下)

修復では粘着テープは使用しない、というのが常識のように意識に刻み込まれていたのだが、中性紙ボード同士の貼り付けなど、資料に直接触れない部分では、手軽な両面テープを活用して効率化されていることが新鮮だった。一方で、粘着剤(テープを含む)を直接資料にあてる処置は、応急処置であってもしてはならないと随所で強調された。テープの粘着剤が紙にしみ込んで取れなくなったり染みになったりしている資料は、残念ながら図書館では見かけられるものである。こういった誤った処置で資料をさらに傷めたり本格的な修復処置を妨げたりしないよう、職員全員が意識をする必要がある。

### 3.3 講習会を終えて

増田先生の環境管理のお話には、新図書館の建築を

計画している本学にとって、建築計画に反映させるべき点が多々あった。新図書館の建築は、建物そのものを IPM の考え方を取り入れて計画できる絶好の機会である。教えていただいた知識を生かし、少しでも資料にとって良い環境が整えられるようこれから計画に関わっていきたい。

岡本先生の演習では、さまざまな材質・構造の資料を、実物を見ながら解説していただける、大変貴重な機会をいただいた。また、この講習会は西洋古典籍を対象としたものではあるが、教えていただいた中でも保存箱や封筒フォルダーなどそのまま一般資料に適用できるものも多く、なにより、作業の過程で教えていただいたちょっとした技術がいろいろなケースで役に立っている。今後本学の資料保存に携わっていくために、非常に有意義な講習会だった。



写真5 センターで作成された保存容器の参考展示

#### 4. 謝辞

講習会中、講義をしてくださった先生方はもちろんのこと、山崎センター長をはじめとするセンターの皆様には大変お世話になった。また、本稿執筆に当たっても、センターから掲載のご快諾をいただいた。この場を借りて心から感謝を申し上げたい。

#### 参考文献

- [1] 第 31 回 西洋社会科学古典資料講習会テキスト [http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/education/images/text\\_31.pdf](http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/education/images/text_31.pdf) (参照 2012-6-4)
- [2] 増田勝彦, 岡本幸治, 床井啓太郎, 西洋古典資料の組織的保存のために (改訂版), 一橋大学社会科学古典資料センター, 国立, 2010.